第四十八回　武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数　二百三十九句　　選者　墓目良雨

特選

合掌に霧吹き上げ来遙拝所　狭山市　古谷彰宏
おほかみの護符貼る井戸や柿若葉　青梅市　津布久信雄
天高く大口様へ奥参り　練馬区　川村能正
凋の声宿坊の朝まだき　文京区　宮本象三
葉山葵を地酒のあてに御師の宿　新座市　長谷川栄

秀逸

武田菱透かす障子や御師の宿　狭山市　古谷彰宏
御師の宿石蕗の庭隅白衣干す　狭山市　古谷多賀子
霧の珠目にも眩しき蜘蛛の網　足立区　中村拓也
登り来て神のお許の秋海棠　青梅市　西村康治
宿坊の板のきしみや秋の風　世田谷区　菊池晃子
新緑の嶺にこだます法螺の声　青梅市　久保田享
神殿に禰宜のすり足淑気満つ　新座市　長谷川栄
冬青空祝詞響くや御嶽山　宮城県刈田郡　我妻遼
霧深く沈めて山や魂迎　府中市　天地わたる
山夕やけ雪舟墨をもてあます　日の出町　渡邊敏雄

佳作

秋高し石段駆ける子等の声　練馬区　河原日向子
竹の節借りて華やぐ春の雪　新座市　長谷川栄
汝を待つ御嶽の一人静かな　世田谷区　中古苑生
御岳山夫婦で愛でる紅葉かな　東久留米市　阿波連光太郎
初詣舞茸天ぷらくるみ蕎麦　練馬区　川村能正
秋うらら途切れぬ傾斜一歩ずつ　品川区　木村玲子
老鶯や雨のそぼ降る霧の中　府中市　天地わたる
涼風や木陰に蓮華升麻あり　文京区　内田健太郎
支へある千年欅小鳥来る　青梅市　津布久信雄
神聖な御嶽に入る冬の空　狛江市　鎌田典子

選者吟　しづけさや霧満月の御嶽山

奉納俳句選評

合掌に霧吹き上げ来遙拝所　古谷彰宏

奥宮を遠くに遙拝し祈りの合掌をした刹那、谷から霧が吹き上げてきた。御嶽の神と心が一つに繋がったことを感じたことだろう。神の息吹の霧に触れた作者は幸せだ。

おほかみの護符貼る井戸や柿若葉　関迪子

神話の時代から山岳神の守り神はおほかみだ。山を生活の糧にしている人はおほかみの気配の中に生きている。宿坊の景色だろうか、井戸におほかみの護符が貼られ日々の安寧が保たれている。柿若葉が実に美しい。

天高く大口様へ奥参り　川村能正

秋晴れの一日。奥宮にあるおおかみの神へお参りした。険しい山道を物ともしない心意気が素晴らしい。山の神さまに親しむことが心身の安寧を招くことに繋がる。

凋の声宿坊の朝まだき　宮本象三

御師の人々は早起きだ。それよりも早く山では凋が鳴き始めたところを描いた。寝床の中で山の動き始める気配に耳を欹てる作者が見える。

葉山葵を地酒のあてに御師の宿　長谷川栄

都会で生活するものにとって、宿坊の料理は新鮮である。どれも捨てがたい。今晩の突き出しは葉山葵のお浸し。地酒の素朴な旨さとよく合うことよ。

第四十九回　奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付は指定用紙にて投句箱へとする
（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切り　令和四年一月十五日
一、発表　令和四年三月中旬

四季を通じ「御岳山を題材」とした俳句を募集しております。大勢の方の投句をお待ちしております。

選者ご挨拶

悠久の歴史を秘める武蔵御嶽神社の奉納俳句の選をする栄に浴し身の引き締まる思いです。

前任の岡田日郎先生の徹底した客観写生の俳句を私も心掛け、武蔵御嶽神社の素晴らしさを俳句で記録するお手伝いをさせていただく積りです。

俳句は大自然から授かるものというのが私の考えです。日常の殺伐とした生活を抜けて御嶽山の中に飛び込み身も心もリフレッシュすれば自ずと俳句は生まれてくる筈です。

何度もお山に登り、四季それぞれの武蔵御嶽神社の素晴らしさを体感すればきっと良き俳句が得られることでしょう。

皆さまの素晴らしい作品に出会えることを期待いたします。

墓目　良雨

選者略歴

墓目良雨（ひきめりょううう）

昭和17年埼玉県生まれ。本名・駿英。

『春耕』皆川盤水・『風』沢木欣一に師事。昭和63年に「春耕賞」を受賞。現在、『春耕』副主宰兼編集長・『東京ふうが』主宰・『塔の会』会員・俳人協会監事をつとめる。「お茶の水俳句会」「皆中句会」「神保町句会」「春耕同人ネット句会」にて句会指導。芭蕉研究、蕪村研究を長く手がけ、現在は高野素十の研究を行っている。

また、『春耕』誌上に「鑑賞　現代の俳句」「俳句に向き合う基本」「盤水一句鑑賞」を、『東京ふうが』誌上に「素十俳句鑑賞」を執筆。句集に『駿河台』『神楽坂』『菊坂だより』『九曲』『２００９一日一句集』ほか、著書に『平成　食の歳時記』詩歌集『酢うき苺』、その他編著若干。

節分

『一二四年ぶり、二月二日の節分祭』

令和三年となり、立春の前日が一二四年ぶりに二月二日となった本年の節分。コロナ禍での二回目の祭礼となりました。例年の年男・年女による追儺式では、福豆を拾われる方々で賑わっておりましたが、緊急事態宣言下での節分祭となり、追儺式の参列や福集めの皆様には来社をご遠慮いただき、宮司・祭員のみでの執行となりました。厳粛な空気の中、追儺の儀では、晴れ渡る青空の下で皆様の厄難消除と新型コロナウイルスの終息を祈り、関東平野へ向かい厄除・招福の豆を声高々に撒かせて頂きました。

また、全国的に珍しいと思いますが、節分の当日、御嶽神社の神職達は山を下り、青梅市内を始め、あきる野市・福生市等まで足を伸ばします．これは節分祭へお申し込み頂いたものの、当日のご参列が厳しい企業様や個人宅へ神職が伺い、豆まきをさせて頂くのです。今年は参列をご遠慮頂いたため、数百件の豆まきをさせて頂きました。感染防止のため小さな声での追儺の儀となりましたが、神職がお伺いして執り行う追儺の儀は、例年以上に大変お喜びいただき、私たち神職も喜びも一入（ひとしお）でした。来年の追儺の儀が、大きな声で鬼遣らいと福招きが出来ますよう、そして一日も早く日常を取り戻し安心した生活が送れますよう、これからも祈念してまいります。

※節分祭年男・年女のお申し込みは、年明け一月中旬より承ります。
※ご自宅や会社での追儺式をご希望の方はお電話にてお問合せください。
（配札範囲は、青梅近郊となります。）
※遠方の場合、祈祷札・福豆等は発送させていただきます。

「追儺の儀」の様子
写真提供：炭鳥蔵ＩＫＡＤＡ